
みんなで遊ぼう（？）ミニゲーム！（集合編）

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんなで遊ぼう（？）ミニゲーム！（集合編）

【Zコード】

Z8873E

【作者名】

ロニー・タン

【あらすじ】

別に何の思惑とか陰謀とかでもなく、適当な感じで集められた高校生達（一部違う）！遊園地に集合し、何か色々とやるんじゃないかな！？【使用作品：「学園珍事ファミリアー」、「自称予測不可能のベタSTORY」、「魔王様の悩みの種」「オレと死神？！」、「勇者以上魔王以上」】

(前書き)

出来は……なんていうかスママセン。

がたんごとん。がたんごとん。

「ん う、ああ？」

小刻みに不規則な揺れの中、天詩文一は目を覚ます。
寝ぼけた頭でここはどこだつたか、と考え、ふと両肩にある重みに気が付いた。

左肩、傾けて頭を預けて眠る茜色の少女。即ち、文一の武器にして魔法という技術の結晶たる魔道書、茜。

左肩、ほぼ全身でしなだれかかるように眠る金髪碧眼の少女。即ち、文一が執事として仕える対象であり小鳥遊という巨大企業の社長令嬢、俺口調が印象的な小鳥遊たかなし 灯夜ともよ。

「え、えーと……」

焦る。大いに焦る。

どうしてこんなステキイベントが知らない間に起つちやつてるんですかー、という叫びを飲み込み、辺りを見回す。

どうやらここは電車内のようだ。広告もつり革も無いのが不自然だが、それ以外は文一の知つている電車とそれほど変わらない。そして、目の前にもう一人、人影を見つけた。

「やあ お目覚めですがぶつーー？」

蹴り飛ばした。

「ちょ、ま、おま、フミー！ そんな暴力的な子を作った覚えはあ

りません！」

「うわあー、何でお前が黒幕面して田の前に居るんだよー。」

蹴り飛ばされた拳句、踏みつけられて情けなく床に転がっているのは……作者ヨーナンだった。

文一はそれを見下^トげて、質問した。

「で、なんでこんな状況になってるんだ？ 人気投票かその発表か、それとも設定説明会か？ とっとと吐いた方が楽になれるぞ、あ？」

「ちょっと待つてくれ！ お前、何か違う！ そんなキャラじゃないはずだよ文一ー。」

「うわあそこ寝起きでこんな状況で、相当立ってるんだよー。」

文一が締め上げると、作者は涙目になりながら開いた携帯を差し出した。

そこに映っていたのは

「コメディクロス企画？ 何だお前、更新遅れてるって言つて、なんでこんな事やつてるんだよ？」

「リアルに痛いところを突くなー！」

咳き込みながら作者は席に戻り、いぶかしみながらも文一は携帯を返す。

はあ、とため息を吐きながら元の座席へ。寝ている一人の肩に手をかけ、揺さぶる。

「おーい、一人ともー」

まずは灯夜が起きた。

「「ひこ」、あみやうた?」

「よしよし、それは本編読んでる人には花見の時と一度ネタなんでやめましょうね。実はかくかくしかじかなんですよ」

「うん、もうか……ふわああ~。うん、たすが「メテイ、かくかくしかじかで通じるな」

セヒはツツコんじやいけないでしょー、と笑いながら、文一は起きない茜を高速で揺わぶり続ける。

「おこ、起きる、茜」

「「ひこ」、ソースカタストロフが……世界の終焉が……」

ものす「こ寝言が聞こえてきた。

そんな寝言に腹が立つたのか、文一は茜に拳一閃。

「「ひこ」、今、なんかテンフルにいいのが一発…?」

「ハツハツハ、起きたか茜」

「天詩……お前、いつもとキャラが違うぞ」

寝起き仕様なんですよ、と爽やかに告げると、文一は茜の隣、灯夜とは離れた席に座った。

「ふう……で、クロスオーバー？ それが何で電車の中？」

文一は尋ねる。

「ああ、うん。実は各世界でみんなが通っている学校から、『各学校の親交を深める為に生徒をお借りします』って感じなのを天下無双高校（文一の学校）名義で出してねえ。今、町外れに作ったテーマパークに移動中だよ」

作者は答えて、一枚のわら半紙を文一に手渡す。
そこに書かれていた校名は

「天下無双学園高等部、聖涼高等学校、武闘院学園、天和湾屋高校
……わ、すげく見覚えある校名だよ」

茜が言つと、ちゅうどいたのタイミング、後部車両からのドアが開いた。

「案内図にはそつ書いてあるな」

現れたのは、茶々畠 悠治に若宮 飛鳥。
それに後ろには、不治宮 紀子も続いている。

「来たかー、武闘院チーム」

作者は氣さくに手をあげて挨拶する。
その作者に、悠治が近づいた。

「お前が主催者か？」

「あ、うん。そうだけど」

「死ねやあ！」

田にも留まらぬ速さで打ち出されたのは、密かに握られていた銃からの銃弾。

ほぼ照準など合わせていないが、銃に慣れた悠治が扱えばそんな事は些細な問題だ。

「うわお危なつ！？」

ボーッとしておけば11・4ミリ口径の穴が開く所を、作者は結界を出して防いだ。

「いきなり何すんだコノヤロウ！ 他人のキャラだからって容赦しねえぞ！」

「それはこちらの台詞だ」

涼やかな金属音。

作者が気づいた時、既に飛鳥は田と鼻の先に居り、文字通り皮一枚というように刀を作者の首に当っていた。

悠治と同じように、飛鳥は刀の扱いに慣れている。薄皮一枚で止めるのもそのままバツサリいっちゃうのも自由自在だ。

「あ、アハハハハハ。いやもー何するんですか。ええ、まあ、はい。
『要望があれば何とでもお申し付けクダサイ』

先ほどとまつて変わり、脂汗をだらだら搔きながら愛想笑いする作者。

しかし悠治と飛鳥は許さない。

「ああそつだな、朝起きたばかりの人間を強制的にワープさせておいて、礼をつくさない訳がないよな……？」

「やつと着替えが終わり、ゆっくり新聞でも読もうとしていた我らを呼び出したのだから、それ相応の理由はあるのだろうな……？」

作者はヒイイイイイイイ！ と喉の奥で叫ぶ。

最後の希望を込めて、頭だけで紀子を見る。

「『飯……悠治の為に』……キッチンと起きて……なの』……『飯……作つてたのに……作つてたのに……作つてたのに……』」

なんだかとつても人を殺しそつな、一重人格の裏面に覚醒した紀子の瞳だった。

「ちょ、ま！ 完璧ワタクシ殺害モードに入つてます！？ 待て！ 待つて落ち着こう！ 僕を殺したところで何も解決しないよ！」

「「うるさい黙れ」

汗だくでまくし立てる作者に、一人は眉一つ動かさずに告げる。そしてそのまま、ゆっくりと刃を

「ちよつと待つた」

刃を、引こうとした飛鳥の手が止められる。

飛鳥の手首を掴んでいたのは、いつの間にか立ち上がりつて接近していた文一だった。

「ソイツ、駄目なやつで変態だけど、一応仮にもウチの神なんだ。許してやつてくれないかな」 飛鳥君

「いやかに、しかし腕には力を込めて文一は叫ぶ。

「文一、か」

ふつと笑い、飛鳥は刃を鞘に収めた。

その様子に安心し、文一は作者に体ごと顔を向ける。

「おいおい、しっかりしろよ」

「す、スマン……つてこうか文一、こつもよつ強くね？」

「ん？ あー、時間軸の問題かな。僕は夏休み終了直後の文一なんだ」

「そつか……うん、そうだよな。お前、弱いもんな。せめてこんな所ではちよつとぐらうに強い姿で出たいよな……」

「なんか哀れみの視線が！？」

「で、まあ色々あつたけどどうあえず説明な」

作者は対面の席に座つた参加者6人を順番に見渡し、口を開いた。

「今回、みんなには三人一組のチームでミーティングで競戦をしてもらつ。」

「ミーティング？」

ほぼ全員が首をかしげる。

「うん、それぞれ一人ずつ出場者を決めて、色々な競技で争つてもうひら」

「ちょっと待て」

作者の言葉を止めたのは文一だつた。

「それって僕達に何か得はあるのか？ 賞品とかそんな感じの……」

「あ、それ私も気になつてた」

「せうだな、ここまで引つ張つてきとつて何にも無しは酷いだろ」

文一の言葉に続く形で茜や悠治が問つ。他の全員の視線も、自然と作者に集まつた。

「もちろんだ。ここで何にも無いとか言つと僕が消し炭つていうか灰も残らないからな」

作者は「ソノソノと隣の席を探り出す。持ち上げたのは、カラフルな絵柄が踊る長方形の紙だった。

「ジャンー、実は今日の目的地、明日オープン予定の遊園地なんだ。そこの乗り物も食事も全無料ペアチケット一組セットもつてけチクショーニードロボウ！」

ハイテンションで作者が叫ぶ。

「へえ、チケットねえ。茜、優勝したら誰か友達と行つてこいや」

「うん、もちろんそのつもりだよー。」

「チケット……ペア……。うん、そうだな……行く相手となると自然と天詩だよな……もつ消去法で天詩だよな……むしろ神々が定めた默示録で天詩だよな……」

天下無双チーム。二名が概ね好印象、一名がヤバイほど好印象。

「チケットって言つても、そんなの別にいらねえだろ。なあ飛鳥？」

「む……悠治よ、それはとても残酷な台詞だぞ」

「はあ？」

「ゆ、ゆゆゆゆー君……チケット！ ホラたまには生き抜きも必要だよ！ ねえ行こいつよー、一緒に行こいつよー。」

「え、いやまあ、いいけど……紀子、そんなに遊園地に行きたいのか？」

「相変わらず鈍感なやつめ（ボソッ）」

「ん、何か言ったか、飛鳥？」

「いや、私は舞と行こうかと少し考えていただけだ」

武闘院チーム。なんだか「ゴチャゴチャしながらも成立。そんなこんなで、チームがまとまつた。

「しかし豪華だな。全て無料などと 大丈夫なのか？」

灯夜が訊ねる。

「作者舐めんなよ。ジェットコースターも観覧車もお取り揃えで食事だって和洋中全部がそこそこ。デザートだってアイスクリームから何からプリンまで」

そこで、ハツとした表情で口を押える作者。

「どうしたんだ？」

文一が尋ねると、作者はガクガクブルブルと首を横に振るつた。

「ば、バカヤロウ！ いくらほんとお邪魔してないからって忘れんな！ この電車、作品結界がかなり薄くなつてるから……」

そこで電車が、大きく横に揺れた。

文一は灯夜を、悠治は紀子を支えながら、それぞれ辺りを見渡す。その時、声が聞こえた。

「ブー……」

大きくタメを作るよう人にその言葉は響き、その後静寂は戻る。表面上は。

「クッ……」の気配、何者だ……！」

電車の壁にもたれかかったまま、飛鳥が呟いた。

「あ、主！ 私達のと質が違うけど……魔力！ 魔力が近づいてる！」

揺れで飛ばされて上下逆転した体勢のまま、茜が叫んだ。

「リー……」

そして、再び声。

作者が立ち上がって逃げようとした時、それは訪れた。

「ンー！」

某アクション映画のように電車の窓を叩き割つて現れたその人影は、作者の頭を蹴り飛ばし、そのまま地面で回つて衝撃を殺す。そして作者は盛大に吹っ飛び、首から見事な着地でゴキゴキゴキという綺麗な音を電車中に響かせた。

「アハハハハ！ プリン一日食べ放題はこの私が頂いたあ！」

そんな感じに盛大に、魔王アイスと勇者アキラを縄で縛つて引っ張つたもとい

引き連れた女子高生が現れた。

常に苦労性な魔王、通称マー君をかなり酷い感じに仕立て上げる少女。まともにしてれば平穏無事に暮らせるはずの異世界の勇者、通称アーチャンを巻き込む少女。

名を、里原 葵と言つ。

がたとん!とん。電車は揺れる。

「あー……」

じゅも、北川 一聖だ。今日は何だか知らないがバイトに来てる。いや、いつもはお屋敷で庭師してるんだけどな? その雇い主の住所から手紙が来たんだよ。

『今日の仕事はこの手紙の指示通りに、お客様をガイドする事です。頑張ってください』

みたいな。

今思えばスゲエ胡散臭いんだが……いやまあ、来てしまったものはしようがない。

もう密とやらば一応乗つてゐはずだから、後は登場を待つだけだ。

「オラアー!」

と思つたら、怒声一発、ドアが蹴りで吹っ飛んだ。
そこから首だけ出したのは……うわ、見間違いであつて欲しい、

だが見間違えようも無い顔だ。

あれは……“俺達”の天敵の一人……。

「あまみや 雨宮……かずや 和也……！」

そう、ケンカ最強でドジで、そして確か死神の血も引いていると
いう究極存在。

「あ？ あー……確かに前、文一ン所の影薄だつたな」

「ああそうだ！ 俺は影薄同盟が一人、一聖！ 田頃の駿の恨み、
晴らさせてもらひつー！」

『【注釈】影薄同盟とは、作品内でのいじられキャラ=影薄たちが
集まつてお互いを慰めあつ組織だ！ 勇者以上魔王以上の裂魔狂太
が始祖であり会長として知られているぞ！ ちなみに読みは「かげ
うす」でも「けいはく」でもいいらしい！』

な、なんだこの子供向けアニメみたいな注釈は！？ ていうか恭
田さんの字が間違ってるんだよー 佐久間 さくま 恭田きょうた だ！

「はあん、影薄じときがオレを相手に出来ると？」

ハツ！ そりだそりだ、和也と臨戦態勢中だつた。

「駿の仇！」

俺が叫んで駆け出そりとするとい、和也は悪役100パーセントの
笑みを向けてきた。

「駿がそんなに欲しいんじゃないやねー。」

その瞬間、和也はドアの向こう側から何かを引きずり出し、俺の足元へと放り投げた。それは紛れも無く影薄同盟の一員にして俺の友人、如月 きずなつき 駿 しゅん だった。

だが姿は酷いものだ。服は所々破けており、さらに駿の頭にはピンク色が見えている。

「し、駿……！ クツ、お前ええええええ……！」

駿の頭が……駿の頭が……！

ピンクでハートマークな髪形になっていた。

「伸びてきそうだったんでなあ……刈り直して、もつ一回染めてやつたんだよオ！」

許すまじ雨宮和也！！ 男でロングヘアーというカッコイイ系を地で行く駿になんて事を！！

そうだ……今の俺なら出来る……！ ちよつと前まではただの影薄だったが、今の俺には戦闘能力があるんだ。倒すまでは行かなくとも、一矢報いるぐらいなり……。

「覚悟！ 雨宮和也アー！」

俺は拳を握り締め、和也に向かつて走り出し……

「龍門弾！」

いきなり和也が居る方とは逆のドアを吹き飛ばした何かに巻き込まれ、そのまま空を飛び、ガラスにぶつかってようやく止まった。ていうか背中痛え、むしろ内臓痛え。

「よ、和也」

和也に向かつて気軽に挨拶するそれを見上げ……案の定、ヘッドホンを付けた青年が見えた。

和也が最強というなら超最強、和也がドリというならドリ（なんか某狩猟ゲームの某武器みたいだ）、そんなラーメン大好き魔人……名前は荒木龍一。

「龍一さんも来てたんですね」

「おひ、憂さ晴らしにな。……とにかく影薄臭がしたんだが、やつてよかつたか？」

「ああ、メンドかつたんで別にいいですよ」

死にかけの俺たち一人を無視してドリの会話は続く。ていうか俺達って察知された段階でやられんのかい。

「ぐ……和也てめえ、よくも……」

俺がやられている隙に田覗めたが、駿が立ち上がった。

「影薄だからつて……ナメンじやねえぞ」

駿だけに任せて寝てる訳には行かない。俺も立ち上がる。
そして、俺達は見た。龍一さんの腕に掴まれている　彼を。

「ほお、最近の影薄共は回復早めか。ま、コイツほどじやないけどな」

「「恭田さん……」」

俺と駿は同時に叫んだ。そう、龍一さんの腕に掴まれている彼こそ佐久間 恭田さん。俺達のリーダーとも呼べる人物だ。

龍一さんが手を離し、恭田さんが床へ落ちる。

俺達一人は走り、俺は恭田さんの具合を見に、駿は龍一さんとの間に壁になるように立つた。

「恭田さん！　大丈夫か！？」

「う……駿、一聖……」

俺の言葉に、からりじて返事を返す恭田さん。息も絶え絶えと言つた様子だ。

「テメエ……びつじて恭田さんを……」

駿が叫ぶ。

その視線を平然と受け止め、龍一さんは語り出した。

「ん……ま、三時間ほど前なんだけどな？　あれば学食、朝からなんか強制ワープさせられたからそのまま戻ってきて、登校したらもう昼だった　ってな感じで」

この人……手紙の内容曰くウチの作者の力のはずなのに、ワープ無視した……。

学食

「今日は龍一が来てないから、久しぶりにラーメン食えるな。お、みんなも結構頼んでやがる。これが最後の一杯か」

「な!? 龍一!! あ、ああラーメンだなラーメンなんだなホラ俺のやるからそんな構えんなって……」

}{ } } } } }

「あ、いんなトコかね」

理不尽MAX！

そんな理由で恭田さんは「おもてなし」姿になつたのか！

「理不尽だろアレ！？」
俺、ラーメン渡したよな！？」

あ、恭田さん復活してる。さすがは脅威の回復力。

「ん、まーそれはアレだ。ノリ」

「ノリですか！？ 僕じゃなかつたら死んでたぞ！」

恭田さんのソウルフルな叫びを、龍一さんはあくびしながら聞き流す。

いつの間にか座席に座っていた龍一さん家の居候、勇者のアルスと魔王のクルルは、それぞれ氣の毒そうに恭田さんを見ていた。

「ていうか和也もだ！ 確かに逃げはしたが、お前捕まえてからも殴つたよなあ！」

反対側では、駿が和也に口論を仕掛けていた。

「あ？ 逃げる方が悪いんだろうがよ

「全面的にお前が悪い！」

こちらも同じように、和也が一方的に聞き流している。

これまた同じく一人 和也の家の居候の死神少女、レナや金髪の陰陽師、富鷹秀一が座席に座っている。ただし、こちらは無関心でしりとりをやっているが。

とにかくそれはどうでもいい。俺は怒っている。和也や龍一さんはのどじ組の非道っぷりにだ。

どうして俺達がここまでやられなくちゃいけない？ 影薄だから？ 否、ただ奴等が理不尽だからだ。

そう、今こそ俺達の力を見せる時 ライオンは生まれた我が子を谷へと突き落とし、登ってきた者だけを育てるといつ。

それと同じだ。今まで長い、長い長い、果てしなく長い間落ちてきた谷。今、ここが底であり、そしてこれから登る事を考える時期だ。

登らなければ　生き残れない。

「駿！　恭田さん！」

俺は叫ぶ。今まで黙考していた俺がいきなり口を開いたからか、全員が動きを止めてシンとなる。

今こそ、宣言すべき時だ。

「俺達、影薄同盟は今ここに、貴様らを全員蹴散らして今回の優勝を頂く事を、宣言する。」

ぐ、あー……長い事電車乗つてると、背中が痛くなるなー。

あ、どうも文一です。作者の奴、初めての方で三人称コメティイ諦めたみたいですね。

「セー！　余計なこと言わない！」

作者のお小言、どうでもいい。

ま、つー訳で遊園地ですね。すごいですよ。広さだけなら東京の方にあるというネズミーランドにも劣らない規模です。

内装も凝っていて、ファンシーなヌイグルミみたいなのもありますね。特進市から他県へのイメージ戦略でしょうか？

……さて、もう面倒くさいから語りかけやめます。ずっと心の中

で敬語とこつのもアレなんで。

「どうも、今日はお手柔らかに頼みますよ、師匠」

という訳で遊園地のあるアトラクション前、僕達はそれぞれ思いの相手と世間話をしていた。

僕は師匠 和也さんと話をしている。「一度だが刀の使い方を学んだ事があるので、師匠だ。ちなみに、僕が使う「じちや混ぜ格闘術」見様見真似の雨宮流も混じっているのは、誰にも内緒だ。

「文一か、まあやる事が戦闘とも限らないんだしな」

「ええそうですね。家事とかかもしれませんね」

「……ほお、文一よ。それは、家事なりばオレに勝てるとしても言いたいのか……？」

「ああ、どうでしょ?」

師匠の体から殺意とはまた別の、闘気のよつたものが見える。僕からも滲み出でてる事だろう。

もし家事勝負になつたとしたら……執事として、負ける訳にはいかない……例え相手が主夫だろ?と…

「何だか知りませんが、今から氣を張つっていても疲れるだけですよ?」

と、僕と師匠の間に勇者……いや、一人いるから分かりにいくいな。なんて呼ぼう? えーっと、本名……本名……ヤバイ、里原さんが本名で呼んでなかつたから分からない。

「えーっと、何か御用ですか、アーチャーさん？」

アーチャーさんが情けない顔をして膝から倒れそうになつた。ゴメンナサイでもこれ以外に思いつかなかつたんです。

「ま、まあいいですけど……。お一人とも、リーダーなんでしょう？ 順番を決めなくとも良いんですか？」

「「あ、やうだつた」」

僕と師匠が綺麗にハモる。それとの作品の主人公がリーダーになる決まりであり、リーダーとはつまり競技に出る順番を決める役なのである。

「おーい！そろそろ集まれよー！ そんで順番も決めとけよー！」

少し遠くから作者の声が聞こえる。そろそろ始まるのだろう。塊になつた一、三人の集団 薫とレナさんとクルルさん（バカキヤー！）とホンマードメーカー同士気が合つたのだろう（う）、お嬢様と不治富さんと里原さん（お嬢様居るのに、前の三人よりも女らしい事話していたと思えるのは何故だらう）、イッセに駿君に狂他さん（影薄について語る事はない）、龍一さんや富鷹君と飛鳥君（刀とか剣繫がりなのか）、まあ……マー君さんと悠治君にアルスさん（何を話していたか非常に気になる）で、作者の元へと向かつた。

「師匠……僕には珍しい事ですが、貴方が出るんならやる気が出でましたよ」

「そりや良い事だ。オレもな……何の競技かはわからねえが、龍一さんには勝ちてえんだよ」

僕達も、足早に作者の方へと向かう。戦うべき相手と、戦うために。

……今さらだけど、そいやなんで影薄連合が参加してるんだろ？

＊＊＊

『あー、テステス。はい良好。えー、これから、「みんなで遊ぼう、ミニゲーム大会」を始めたいと思います』

作者がマイクを持つて実況席のようなどこに座っている。
競技者が並んでいるのは、水上や陸上を縦横無尽に駆け巡るの
が売りのアトラクション、そのレールの上だ。

『もちろんアトラクションの電源は入っていませんから轢かれる心
配はありません。ま、途中で手動が必要になるかも知れませんが。
ルールとしては単純な鬼ごっこです』

そして僕はメンバーを見て……悔しいが、決まったと確信した。
今回の参加者は

天下無双チーム 茜
武闘院チーム 飛鳥
魔界チーム アキラ
聖涼チーム 秀一
天和湾屋チーム アルス

となつてゐる。

知つてゐる人は知つてゐるが、駿君には“憑依”という裏技が会つた。神馬スレイプニルを身に宿らせる事ができる……それが無くても十分速いのだ、これはもう決まりだらう。

『で、まあそれだけだと面白くないので、追加の仕掛けでーす』

お、もしかしてこれで平等になるか？

作者が手をかざすと、どこからともなくコンテナが現れ、六人の後ろに置かれた。

中身は何だらうな、とか考えてゐると……

シャググググググググググ！

なんだかこの世のものは思えない凶暴な叫びが聞こえてきた。ヤの付く職業の人だつて裸足で逃げ出しだらう。

「作者、これドリンダちゃんだろ」

ドリンダちゃんとは触手だ。ぬらぬらしててかてか光つてゐる触手生命体だ。触手科触手目だ。

『ふふん、誰がそんなワンパターンな事をする?』

作者の得意げな声と共に、コンテナが開く。

その中には

体長はおよそ僕の知るドリンダちゃんの10倍！触手増量お徳用！口が三つに増えて、それぞれ歯がギラギラ光ってる！

『特殊攻城用植物、ドリンダちゃんEXだ

.....。

「「「「「いやワンパターンだろ（でしょ）（だ）……」「」

オールスター・ツッコミ（僕、悠治君、マー君さん、アルスさん、影薄）は、はるか高空へ響いていった.....。

(後書き)

喋っていないキャラが面白い……せつぱんキャラがしゃべること難しいですね……。後半は競技」と別れるので、結構喋ると思います。

次回、激闘編(仮)に続く!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8873e/>

みんなで遊ぼう（？）ミニゲーム！（集合編）

2011年1月14日14時22分発行